

エジプト駐在武官

日誌(7)

ルワンダ難民救援隊と
ピエール、そして国家は！

榊枝 宗男 陸自75

1994年10月、旭川駐屯地からアフリカ中央部の紛争地ルワンダの隣国へ派遣された難民救援隊240名を以て支援するため、エジプトからザイルのゴマ空港に降り立った時のことだ。

突然「私、ニホン語話せませす！」と大きな声があった。旧ザイル共和国の小さなこの地方空港には、隣国ルワンダ共和国から戦禍を逃れ、80万もの難民が押し寄せていた。

空港のフェンスは救援物資を待つている難民で黒山の人だかりだった。そのフェンスの外側から現地人らしき黒光りした顔の男が両手を大きく振りながら「私の話を聞いてください」と真剣に叫んでいる。日本から1万2千km離れたアフリカの奥地で、まさかの日本語に、わが耳を疑った。

彼はピエールという名前で、2年ほど前に長野県で木工の研修を半年受け、日本語を習っていた。研修後ルワンダへ帰国し大工店を営んでいたが、内戦が勃発したので虐殺を恐れ、

着の身着のまま国境を越えたと云う。たどり着いた難民キャンプで読んだ新聞に、「日本の自衛隊がゴマへ難民救援に派遣される」との記事が載っていた。沈んでいた気持ちが一挙に晴れやかになり、いよいよ自分にも運が向いてきたと思いつつ、10日前から空港のフェンスに立ち、日本からの自衛隊の到着を今か今かと一日千秋の思いで待ち続けたと語ってくれた。

早速、難民収容キャンプへ向かうと、国を失った数十万のルワンダ人が、国連から支給された青いビニールの敷物をテント代わりにして、難民村が丘陵の山頂からふもとまで何百と続いている。小さな乳飲み子を抱きながら物乞



ゴマ近郊の難民キャンプ 筆者撮影

いする母親や、内戦で両親を失った孤児たちの姿が悲壮的であった。

国家が崩壊するということは、国民の平穏な生活を根底から覆す。それまでの社会機構や価値観が突然消滅し、昨日まで大学教授や弁護士をしていた人々が難民となり、収容所のテント生活を余儀なくされている。

ピエールの説明に、改めて国家が存在することの尊さを痛感させられた。